「ウェルビーイングな都市」を目指して
―有識者が贈る言葉―

当所では、2019年12月に創立140周年を迎えたことを記念し、10年後の2030年に向けた「まちづくり提言」を作成しました。とりまとめにあたっては、当所がまちづくりについて長年提言してきた内容や経緯を踏まえつつ、各界、各世代の声に耳を傾けてきました。この誌面では、岡山が「日本一住みたいまち」になることを願う有識者の声をご紹介いたします。

阿部 宏史 氏

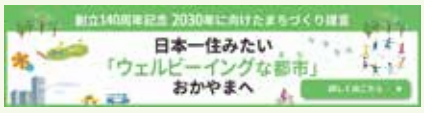
あべ・ひろふみ
IPU環太平洋大学副学長（地域・社会連携担当）
1977年3月京都大学工学部卒業、同大学院修士課程修了、工学博士取得。京都大学工学部助手、岡山大学環境理工学部教授、環境学研究科長、理事・副学長などを経て2020年3月定年退職し、岡山大学名誉教授。2021年2月から現職。岡山県、岡山市、倉敷市などで都市、交通、環境関係の審議会会長を務める。

岡山を人と緑の都心をもつ歩きたくなる都市に

岡山商工会議所は、新たな提言の中で岡山市の将来像を「ウェルビーイングな都市おかやま」と表している。その基本理念は、1994年3月の「人と緑の都心1㎞スクエア構想」で示した「都心は人が集まり住むところ」であり、人間性を重視し、豊かな水と緑を活かしていく都市づくりの姿勢は変わらない。

私は瀬戸大橋開通直前の1987年に岡山大学に着任したが、それまで所属していた大学の研究室で、ヨーロッパの先進事例として「公共交通を便利に、快適に」、「歩行者の優先と人間性の尊重」、「マイカーの規制と抑制」という3つの動きを学んでいただけに、岡山商工会議所の方々による都市づくりの進んだ考え方には驚かされたものである。

それから30年近くが過ぎたが、地域は自動車への過度の依存から脱却していない。車依存社会のマイナス面は認識されているものの、その是正に向けた市民、産業、行政の三者による合意形成が遅れてきたことが大きな原因である。岡山商工会議所による新たな提言は今年3月に公表されたが、それに続いて6月に岡山市が「第六次総合計画・後期中期計画（2021－2025年度）」を発表した。岡山市では、最近数年の間に「総合交通計画」、「地域公共交通網計画」、「都市計画マスタープラン」、「立地適正化計画」などの一連のまちづくり方針を示しており、岡山商工会議所がこれまで提示してきた岡山の姿を行政や市民と協働して実現していく好機と言える。

日本の都市は、急速な少子化・高齢化、人口減少、コロナウイルスの蔓延による社会・経済の混乱など、将来が混沌としているが、今こそ地域の多様な主体が明確なビジョンの下で一丸となり、持続可能な都市を実現していくべきであろう。その時の基本理念は、やはり人間性と豊かな自然環境を重視した「人と緑の都心をもつ歩きたくなる都市」である。

当所では、これからの10年、おかやまが心身ともに健康で豊かさと幸せを実感できる、ウェルビーイングな都市となることを目指し、充実したICTデジタルインフラの整備や、緑化とカーボンニュートラルにつながるグリーンインフラの整備によって、ハイブリッドタウン岡山を創造していきたいと考えています。本提言は、当所ホームページに「本編」「資料編」として全文掲載しております 。ぜひご覧ください。